

職人さん。

いの町のまらで金になりました

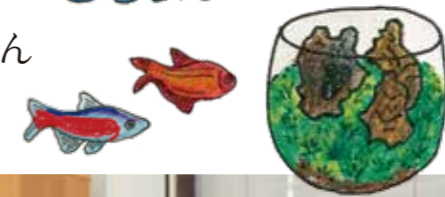
第11話

2021.11月号

美しく調和した水辺の世界を創りたい。

生態系づくり 筒井 健心さん

BONO



プロフィール：いの町出身。大阪市で商業施設の設計をしていた40代前半、天野尚さんが開拓したアクアリウムの世界に惹かれて専門ショップを開業。2019年、50歳を機にUターンし、実家で移転オープン。

透明感あふれるガラス製アクアリウムの中には、小さな魚たちや多様な水草が本来生きていくアマゾン川流域の水辺が、生態系として再現されています。二酸化炭素を補うので水草は適度に光合成を行い、魚に必要な酸素を放出します。バクテリアも一緒になって循環を持続し、その水景（アクアスケープ）から平和を感じさせてくれる、生きものたちの世界。

オープンしたのはコロナ前年、2019年5月4日のGW。オーナーの筒井健心さんは、大阪市でこのお店を7年営み、50歳を機に実家へUターン、移転しました。お父さんが司法書士をしていた事務所を改装したもので、国道添いの立ち寄りやすい場所にあります。

都会で働きながら、いつかは故郷へ帰ろうと思っていた筒井さん。まさにコロナ前だからできた移転でした。「こういう店ですから、自然の多い高知、特に仁淀川のそばでやるのが良いなあと。お客さまは20代から80代まで幅広いです。」



コンテストに応募する規模のアクアリウム。



苔を愛でるテラリウムも。

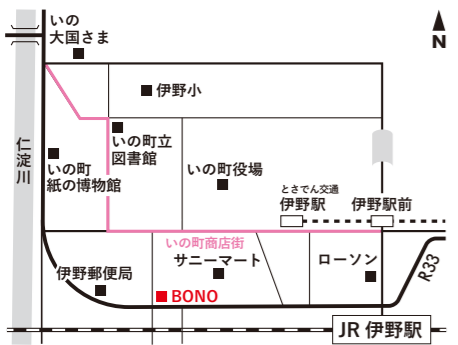


アクアリウムに囲まれて趣味の話に花が咲きます。

アクアリウムづくりの相談などにカフェカウンターも併設しました。もちろん一般のお客さまも歓迎です。「弟にも助けてもらっていて、彼がいる時はサイフォンコーヒーが飲めますよ。」ニコッと話す筒井さんも、美味しいドリップコーヒーを淹れてくれます。

大阪で商業施設の店舗設計をしていた筒井さんは、自然保護を訴えた写真家で水景づくりの第一人者、天野尚さん（故人）の世界に憧れ、この道へ。「人生どうせなら、なにか楽しいことをしようと思っていたんです。」水草だけを観賞するのが主流だった水槽に石や流木を配し、撮影した作品集も残すネイチャーアクアリウム。その引き算構図のデザインは世界を熱狂させ、海水アクアリウムから淡水へ移る人も多いのだとか。写真を送って審査するコンテストも開催されています。天野さんが、仁淀川にも住んでいるヤマトスエビを輸出したこと、ヨーロッパではアマノエビとも呼ばれています。「あのかわいらしい小さなエビが世界進出しているという驚き。

酸素の泡を出す水草の森や流木の間を小魚が



アクアリウムショップ&カフェ BONO

いの町幸町1
営業/11:00~18:00
定休日/水曜・木曜
TEL/088-893-2310

